

「LRRI 会員＆役員だより」 （令和 8 年 10 月号）

「翻訳問答」を廻って

今はこよなく土木工学を愛する筆者ですが、実は、嘗ては文系志望でした、と書きますと、「それはちょっと意外ですね」というお声がどこかから聞こえてきそうです。年を取るほど昔話ばかりになってしまうのは、世の常とかですが、大昔（1960 年頃です）、わたくしも高校生の時がありました。その時の将来の夢は“物を書いて生活できる仕事”（文筆業？）につくことでした。それで、高校 1 年生の進路志望調査の時に、“大学は文学部か外国語学部志望”と書いて担任に提出しましたが、父親にダメ出しをされてしまった記憶があります。“家族帝国主義”の結果です。

文学を志しましたが、創作には関心が強く、小学校では学級新聞を作り、中学校では小説を書き始めました。また、「トムソーヤの冒険」、「ハックルベリー・フィンの冒険」や「ガリバー旅行記」といった有名な物語を子供向けの英語読本で読んだ記憶があります。ただ、翻訳という業務には偏見がありました。理由は単純で、「人の書いたものを翻訳してどこが面白いのか」ということにありました。しかし、それは浅はかな考えであることはだれが考えても自明です。世界の名だたる名著を紹介するのは翻訳者の大事な仕事です。その結果我々は言語の異なる世界の名著に遭遇することができるのです。その後、時間はかかりましたが、翻訳という仕事への思いはさらに浅はかだったと気づかされ、恥ずかしい気持ちでいっぱいになりました。

切っ掛けは 数年前に、片岡義男・鴻巣友季子共著「翻訳問答」（左右社、2014）と続編の鴻巣友季子編「翻訳問答 2」（左右社、2016）を読んだときでした。最近になって、その 3 として、「翻訳、一期一会」（左右社、2022）も出版されいると知って購入しました。その 3 を読む前に、この機会にと思って最初の 2 冊をまとめて再読してみました。

最初の著作では、著者のお二人が 7 名の著名な外国の作家の特定な作品をひとつずつ取り上げ、その一部の英文をそれぞれが翻訳したものを持ち寄って意見交換するというものです。短い文章でも訳者の思いがそれぞれ違って大変興味深いものです。その中には、著者の大好きな作家、レイモンド・チャンドラーの名作『長いお別れ』（The long Goodbye）が取り上げられています。そもそも、冒頭のタイトル訳から面白くて、片岡は、『会えないままに』、鴻巣のそれは『さよならは一度だけ』なのです。問答のなかでも紹介されていますが、村上春樹の翻訳タイトルは、英語そのままの『ロング・グッドバイ』です。もちろん、『長いお別れ』は、ご承知のように、名訳と定評のあった清水俊二によるものです。タイトルからしてこうも違うのですから翻訳内容も違うは当たり前です。

一方、「翻訳問答」2 では、前作とは少し趣向が変わっています。日本の名著を外国語訳（英訳中

心) したものをもう一度日本語訳したものを鴻巣と5名の作家が持ち寄って議論するというものです。例えば、夏目漱石の「吾輩は猫である」の英訳(“I AM A CAT” by Kan-ichi Ando)の冒頭の



(a) 翻訳問答、2014)

(b) 翻訳問答、2016)

(c) 翻訳、一期一会、2022)

図-1「翻訳問答」三部作(左右社)

部分を鴻巣友季子と奥泉光がそれぞれ日本語訳したものを持ち寄るのですが、ここでも、その1と同様に、タイトルの英訳から面白いのです。奥泉光のそれは、『あいあむあキヤット』、鴻巣のそれは、『キャット・イン・ザ・ライ』(村上春樹訳「キャッチャー・イン・ザ・ライ」*風文体)と『わたくし猫なんです』(ノーマル翻訳バージョン)の二つです。これ一つを取ってみても翻訳の世界の面白さや奥深さが分かります。そしてまた、言葉の奥深さと言葉の選択の重要さも感じ取れます。実に、興味が尽きず、面白い! 翻訳も芸術です。

(*J.D. Salinger(米国の小説家)のThe Catcher in the Ryeの新訳(皆さんもご存知の通り、村上春樹訳以前は、「ライ麦畑でつかまえて」という邦訳で通っていた。ただ、残念ながら、どちらも、電子書籍 kindle 版にはない)

「翻訳、一期一会」と題する三部作の最後は、翻訳とは縁のなさそうな著名人との問答も含めて一層自由に翻訳に挑んで問答を続けます。まず、通常、『風に吹かれて』で通っている、ボブ・ディラン(ノーベル文学賞受賞者)のヒット曲“Blowin' in the wind”の標題をイラストレーターの横尾忠則が『答えなんかほっておけ』と訳し、その理由を鴻巣と問答を続けます。非常に哲学的です。ディランの哲学を横尾自らの芸術論とを対比して考察できる横尾忠則はやはり只者ではないことを実感させられます。

こうして考えているうちに、唐突ですが、文学における翻訳と音楽における指揮とは共通する部分がある

ように思えてきました。嘗て、筆者は毎年年末に聞くベートーベンの「交響曲第九」は“誰が振ろうと違いが良くわからない”と書きました。ただ、毎年年末に異なる指揮者による第九を一枚ずつ買って聞いているうちに、少しずつ違いがわかるようになってきました。もちろん、それぞれ異なっていることだけで専門的なことは良くわかっていないのですが、おそらく音楽を通して指揮者が描く物語が違ってそれが音として表現される結果、同じ楽譜も異なって聞こえるのではないのでしょうか？そして、その結果、聴衆の魂を揺さぶる聞かせ方をする指揮者を“マエストロ”というのでしょうか。名翻訳者（例えば、チャンドラー作品の清水俊二）と名指揮者（第九のヴィルヘルム・フルトヴェングラーや小澤征爾）とはその意味では共通していると思えてきました（もちろん、村上春樹も名翻訳者であると信じています）。



図-2 ベートーベン作曲「交響曲第九（合唱付き）」のフルトヴェングラーと小澤征爾

更に考えているうちに、ちょっと短絡的ですが、

文学創作・作曲 ■ フロントエンド的創造作業

翻訳・指揮 ■ バックエンド的創造作業

ではないかと思い付きました。ただ、あまり自信はありませんので、いつものことですが、本件についても生成 AI に意見を求めてみました。長い会話になりましたが、要約すると以下の通りです。

◆文学創作・作曲＝作品の表層や体験を直接設計する創造

◆翻訳・指揮＝すでにある言語・楽譜・演奏者・文化的文脈を組み替え、別の形で実現する創造

と定義すると、文学創作と作曲は、作品のための世界や表現を新たに設計する「生成系のフロントエンド」であり、翻訳と指揮は、既存の素材や規則を解釈し、別の媒体・環境・身体を通

して実現する「媒介系のバックエンド」であるということができる。

結論としては、作品を「作る」創造（文学創作と作曲）と、作品を「別の条件下で生かす」創造（翻訳と指揮）の対比、と捉えるとかなり有効である。

上記のことをまとめると下記の表になりますが、おそらく抵抗感を持たれる方も多いと想像しますので、あくまでも生成 AI の意見だにご理解ください。

表-1 文学と音楽におけるフロントエンド的&バックエンド的側面

フロントエンド的	バックエンド的
文学創作	翻訳
作曲	指揮
作品を直接生み出す	既存の素材を解釈・変換・統合する
読者・聴衆に届く表現を設計する	原作・楽譜・演奏者などを媒介して結果を成立させる

人生は残念ながらやり直しができませんが、やってみたかったと思いつつ、憧れで済ませて、日常的には、趣味の範囲にとどめておくことの方がいいのではないか？という気もしています。少なくとも自分の場合はそう言えるようです。したがって、「土木工学を選んでよかった」というのが結論です。この結論に至るまで、こんなに長々と思いを綴ってきました。お付き合いいただきありがとうございました。

憧れは 遠くに置いて 想うもの

明日を生きゆく 糧となりゆけ

（令和 8 年 10 月 1 日，代表理事 安原一哉）

＊追記：村上春樹に関する私見

村上春樹のファンは多いと思います。事実、最新作、「夏帆」（新潮社、2026）はベストセラーのようです。筆者も kindle で購入して読みました。いつものことですが、現実離れた内容で、何を訴えようとしているのかが良くわかりませんでした。“村上春樹の哲学”をもっと学ばなければなりません。筆者はファンではないのですが、なぜか、新作が出ると購入して読んでしまいます。不思議な作家です。

一方、上述しましたように、チャンドラーの「ロング・グッバイ」やサリンジャーの「キャッチャー・イン・ザ・ライ」、フィッツジェラルドの「グレート・ギャツビー」などは斬新で優れた翻訳として定評があり、翻訳物やエッセイの方が筆者には魅力的に思えます。斬新で優れた翻訳物である理由の一つは、村上春樹の優れた英語力にあるのではないかと想像します。そのことが海外でも高く評価される一因ではないかと勝手に思っています。いつか、ノーベル文学賞受賞の朗報が飛び込んでくるのではないのでしょうか？